

認知症者のBPSDへの対応として環境変容による検討

Study by environmental transformation as a response to BPSD of dementia's

○小杉田和樹¹・田辺尚¹・渡辺ななみ¹・中山直之²・遠藤有紗³・遠藤晃祥⁴(桜台明日佳病院)¹(白石明日佳病院)²(介護老人保健施設エスポワール北広島)³(日本福祉リハビリテーション学院)⁴Kazuki Kosugida¹, Nao Tanabe¹, Nanami Watanabe¹,Naoyuki Nakayama², Arisa Endo³, Teruyoshi Endo⁴,(Sakuradaiasuka Hospital)¹(Shiroishiasuka Hospital)²(Geriatric health services facilities Espoir Kitahiroshima)³(Nihon Welfare and Rehabilitation School)⁴

Key Word(繰り返しの会話, 注目量, BPSD)

【問題と目的】

近年, 認知症を呈した高齢者が増加し, 行動・心理症状であるBehavioral and Psychological Symptoms of Dementia(以下BPSD)への対応は介護者にとって負担となっている。東野ら(2002)はBPSDに対して, 家族が提供する介護内容はコミュニケーションで負担が大きく, 家族介護者の不安が大きいと報告している。このことから特に会話による負担が大きく, 不安やストレスが原因で不適切な対応となりBPSDを助長している現状がある。認知症者は同じ話を繰り返す行動が多くみられ, 要望による訴えなのか, 記憶力低下によるものなのか, 注目を得るための行動であるのか定かではない。本研究では, 同じ会話を繰り返す患者に対し, セラピスト側の対応を変えることにより会話内容に変化がみられるのか検討した。

【対象】

対象者は右股関節人工骨頭置換術により入院している88歳女性である。日常生活自立度はFunctional Independence Measureで109点, 認知症の重症度は長谷川式簡易知能評価スケールにて9点であり, 日常生活で物盗られ妄想や, チラシを貯め込む様子が観察された。リハビリテーション場面では休憩中の繰り返しの会話により, 円滑に進行しない様子が観察された。

【BPSDのアセスメント】

訓練休憩時の会話を観察すると, 繰り返し話す行動の原因として, セラピスト側の注目量にばらつきがみられていたため, 会話内容に偏りが出ているのではないかと考えた。つまり, 記憶力の低下によるものか, 注目を得るための行動と推測された。また, 会話中の対象者を観察するとセラピストの目を見ながら会話している様子や, 返答に対して笑顔となる様子が観察されたため, 注目の中でも【頷き】【目線を合わせる】【目線の高さを合わせる】【返答】が独立変数として関与していると考えられた。

【方法】

全会話内容の中でも割合の多かった「師長が来室した」「先生のお母様は素敵」と2つの会話内容を多カテゴリーとして設定し, これらの減少を目指した。繰り返し話す割合の少ない「友人が失語症である」「リハビリの先生になるのは大変」と2つの会話内容を少カテゴリーとして設定し, 相対的に少カテゴリーの会話内容の増加を目指し介入した。

1) ベースライン(BPSDのアセスメント)期: 6日間

全てのカテゴリーに対して, 【頷き(有)】【目線を合わせる(有)】【目線の高さを合わせる(有)】【返答は(自由)】であった。

2) 介入期Ⅰ: 6日間

多カテゴリーに対して【頷き(有)】【目線を合わせる(有)】は継続し, 【目線の高さを合わせる(無)】と, 【返答は「そうなんです」等の一言(減少)】とし注目量を減少させた。少カテゴリーに対しては, 【頷き(増加)】【目線を合わせる(増加)】【目線の高さを合わせる(増加)】【返答数は(増加)】とし注目量を増加させた。その他カテゴリーはBL期と同様とした。

3) 介入期Ⅱ: 6日間

多カテゴリーに対して【頷き(無)】【目線を合わせる(無)】【目線の高さを合わせる(無)】【返答は「そうなんです」という反応のみ(消去)】とし, 注目量を更に減少させた。少カテゴリーとその他カテゴリーはBL期と同様の反応とした。

4) フォローアップ期: 6日間

全カテゴリーに対してBLと同様にした。

【結果】

介入期Ⅰでは大きな変化は見られなかったが, 介入期Ⅱでは注目量の減少とともに多カテゴリー値の減少, その他カテゴリー値の増加がみられた。(図1. 図2)

【考察】

セラピスト側からの注目が対象者の同じ話を繰り返す行動を維持しているといえた。介入期Ⅰでは, 【頷き(有)】【目線を合わせる(有)】【返答数を一言(無)】としていたが, 介入期Ⅱでは, 多カテゴリー値の減少見られたことから, 【頷き(無)】【目線を合わせる(無)】【返答は「そうなんです」のみ(消去)】が, 注目の中でも独立変数として作用していたといえた。

